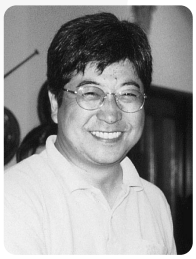
Tips for Everyday Classes

新連載



第1回（総論）

教師力を高める
── 専門性だけでは生徒はついてこない ──

関西外国語大学　教授　**中嶋 洋一**
naka-yoh@kansaigaidai.ac.jp

富山県出身。英検講師派遣制度では初代から講師。荒れた学校に3度勤務し，そこから学んだことを生かした独自の授業論を展開。指導主事（富山県教委）時代には300余りの研究授業（小・中学校）に助言。教頭（砺波市立出町中学校）時代は，県内外からの希望者を対象に授業を公開するなど，魅力ある授業作りについて考えるきっかけを全国の教師に与えた。著書に，『英語好きにする授業マネージメント30の技』（明治図書）他，共著『だから英語は教育なんだ』（研究社），DVD『6-way Street』（バンブルビー）などがある。

1 長期戦に必要な「グラウンド・デザイン」

何かを書くということは，現在行われていることに対して異なる主張を展開するということである。そうでなければ，誰も読まない。今回の連載（全6回）のタイトルを“Tips for Everyday Classes”とさせていただいた。人間の心理やものごとの原理・原則が分かれば，授業を質的に高めることができるということをお伝えするためである。2001年～2002年の連載（「クラスをエンパワーする授業マネージメント」）と同じように，最初に連載の「グラウンド・デザイン」を練り，6回分の原稿をすべて書いた。そこで，その目次と内容をお知らせしておく。

第1回　（総論）教師力を高める
──専門性だけでは生徒はついてこない──
第2回　授業力を高める（1）
── 大切なのは説明ではなく課題や発問の質──
第3回　授業力を高める（2）
──人は好きな人からしか学ばない──
第4回　授業力を高める（3）
──説明から気づきへ。説得から納得へ──
第5回　授業力を高める（4）
──職員室の文化が生徒を育てる──
第6回　デザイン力を高める
──なぜ書く力がつくと，授業力も高まるのか──

本を読む場合，目次は欠かせない。連載も授業もグラウンド・デザイン次第。もし，目次や評価項目が，最初に読み手や生徒に示されないなら，それはファウルである。

2 教師力に必要な要素とは何か

今回，連載をスタートするにあたって，生徒や教師たちの感想を用意した。多くの読者にとっては，「おや?」と思うような内容のものである。読みながら，蛍光ペンか赤ペンで印象に残った部分に線を引いてみていただきたい。授業を変える視点（次号で解説）が見えてくるはずである。

最初にご紹介するのが，中学校3年生の最後の授業で書かれた感想である。

● あっという間におわっちゃった。文法とかいつの間に全部終わったんだろう，といったかんじ。歌とかいっぱい歌えて楽しかった。いい歌にもたくさん出会えて嬉しかった。先生の話も，いつも楽しかったし，授業だけでなく人生に大切なこともいっぱい語ってくださって，いつもためになった。先生の授業を受けてわかったことは，英語は“勉強”なんかじゃなくて“ことば”だということ。教科書の紙面を埋めるための単語の羅列じゃなくて，単語は1つ1つ生きてる，生ものだということを肌で感じた。生きていることばで，世界中の人たちとおしゃべりできたら，どんなに素敵だろうって，

心から感じた。

● すごく頭に入った。学力テスト（40点満点）でも，はじめ20点だったのが，31点とか，すごく伸びていったのですごく嬉しかった。自分は前よりも授業を必死で受けるようになったけど，家でそれほど勉強しなくても（というか全くしなくても）いい点がとれるようになったので嬉しかった。中嶋先生の授業は，楽しくて，魔力（笑）みたいなのが働いて，頭に「糖分」をくれるようだったです。とてもすっきり！ 楽しかったです。高校に行っても先生とやりたいなあ，というか「連れて行きたい」なあ（笑）。それほど大好きでした。昔の英語はやたら長くてずっと遊んでいて，点数も最低（笑）だったのに，今はもっと長くやりたい気分なのです。サスが中嶋マジック!! 先生の，ほかの先生と違う授業体制が好きでした。

次は，昨年度，大学に転身して1年間担当した授業（「英語科教育法」「外国語教育実践」）の，学生の評価である。

● 先生の授業の感想を一言で表すなら，それは「感動」です。90分があっという間に過ぎてしまい，知らず知らずのうちに講義に引き込まれていました。

● この英語科教育法が，小学校から大学まで合わせた授業の中で，一番楽しかった。いろんな本を読み，たくさんの友だちの意見を聞き，自分について考え，本当に有意義な時間を過ごすことができた。この大学に入って先生に出会えたことが嬉しい。この1年は一生忘れないと思う。

● 先生の授業を受けることができただけで，この大学に来た価値があると思います。何が変わったか。この1年で心が変わりました。見方が変わりました。今まで私が出会った先生の中で，先生は見ている世界が違う人でした。先生の教育への熱い思いは確実に届きました。

●人生20年間の中で，初めて「すごい！」と思う先生に出会いました。先生は，本当に足のつま先，心の底から，私たちに「教師になりたい！」という気持ちを起こさせてくれました。と同時に，実際の教育現場に立つことの厳しさを痛感させてくれました。この授業を一言で言うなら「人間の心の固まり」です。

最後はワークショップの感想である。

● 自分の心の中に変容が起きただけでなく，人と関わることが苦手だと感じなかった1時間でした（私は本当は苦手なはずなのです）。みんなで，中嶋先生の指示に従っていただけなのに，知らないうちに英語の論理を身体で覚え（それもごくわずかの時間に！）インプットされていました。潜在している，その人，その人の能力が引き出されていることがわかった，なんとも不思議な，そしてすごい！「授業」でした。

● 先生のワークショップは半年ぶりに受けました。毎回違った視点でお話をしていただくのですが，いつも一つのラインがあって，そこからはブレていないように思います。先生の話はまるで木を見ているようです。だから，毎回復習ができると同時に，新たな発見もある。韓国ドラマとおなじです。授業もそんなふうにやっていくべきなのではないかと思います。グループが，空間が，温かい空気でいっぱいでした。

（いずれも原文のまま）

どうしてこのような感想を書くのか，一体何が違うのか，知りたい！ という気持ちになられたのではないだろうか。

読者の先生方は，このように，生徒を「知りたい！」という気持ちにしてから，授業を始めておられるだろうか。「今日は進行形を勉強します」「教科書の23ページを開けなさい。今から宿題をチェックします」等々で始まる授業は，はたして生徒たちをひきつけているだろうか。

「知りたい！（聞きたい！ 読みたい！）」と「伝えたい！（書きたい！ 話したい！）」と生徒が心から思うような授業にするには，確かな教師力（力量）が必要になる。

教師力とは，①教師の英語運用能力（英語力） ②授業実践力（授業力） ③調査・分析・構成・編集力（デザイン力） ④「人間力（人間性）」の4つから成ると私は考える。

現場では，教師の専門性さえ高ければよいという考え方があるようだ。研究授業の協議会でも，「生徒の反応」よりも「教材や専門性について」がよく話題にされるが，残念ながら，②～④が生徒に及ぼす影響が大きいということがあまり理解されていない。特に，マネージメント力や，人間の心理面を大切にしたコーチングが弱いために，授業が生徒にとって魅力的なものになっていないのが現状である。そこで，この連載では，授業力（第2回～第5回）とデザイン力（第6回）に焦点を当てた。人間力については，関連のあるところで，随時，触れていくことにする。

3 教員と教師の違いは何か

「教員」と「教師」には，どんな違いがあるのか。教員採用試験とは言うが，教師採用試験とは言

わない。同じように，教員免許状はあっても，教師免許状など，ない。逆に，「教師力」という言葉は聞くが，「教員力」という言葉は聞かない。

教員は，学校の構成メンバー。職業欄にも教員と書く。一般的な呼称である。一方，教師は，学問，技芸を教授する人である。だから，「説明・結果責任」も負う。

生徒の心に種火をともすような「教師」は，自らも熱い。そんな「教師」でなければ，生徒の心に火はつけられない。

そして，その熱い先輩を目の当たりにして，若い「教師」が育っていく。どんなことにもめげないで立ち向かう勇気，諦めない忍耐力を身につけていく。もし，身近にいる先輩が「忙しい」と愚痴をこぼす，「入試があるから仕方がない」と言い訳をする，夢を語らない状況なら，後輩もいつしか，現実の中に埋没していく。情熱が抜けてしまえば，残念ながら，たくましい日本国民，共生できる地球市民を育てることはできない。

4 「教師」になりたいと思った日

私の初任校では，生徒に対して厳しい指導が展開されていた。先輩からは「生徒になめられないようにしろ」と言われた。授業でも，賞罰を与えるという指導が当り前のように行われていた。例えば，忘れ物をしたら罰を与え，競争に勝った生徒だけを褒めるといった指導である。ほどなくして，生徒たちの反乱が起きた。校内暴力である。作用反作用の法則の通りになった。

私の指導観が根底から覆されたのは，隣の中学校（埼玉県・吉川東中学校）に赴任して来られた奥住公夫先生との出会いであった。

「人は，出会いによって変わる」ということを，そのとき初めて知った。

奥住先生の授業は，私の授業とは明らかに質が違っていた。生徒の目がまっすぐに奥住先生の目とつながっていた。明るい笑い声があった。「エ―ッ?!」という驚きの声が上がった。それは，私にとって，まったく未知の世界のできごとだった。しかし，それは間違いなく，私が「教員」になろうと決めたときに目指したことだった。

私は恥ずかしかった。今まで，生徒たちになんとひどいことをしてきたのだろうと，心から申し訳なく思った。そして思った。自分にもできるだろうか。

奥住先生は，正真正銘「教師」であった。彼の授業は，「授業力」「デザイン力」「人間力」が存分に生かされていた。それからは，まるで私は磁石に吸い寄せられたかのように，奥住先生の書かれた本を読み，彼の授業の「型」や「定石」を盗もうと，何度も授業見学に出かけた。

月刊誌『悠』（2006年6月号）の中で，角田 明氏（教育実践「響きの会」会長）は，教員と教師の違いに触れ，次のように述べている。

> **笑顔を絶やさず，生徒も非難せず，自分の教師力を磨き続ける，そんな先輩や仲間がいる。向上心のある教師は，そのような模範者を見逃さない。真似をしながら失敗を繰り返す。さらに自己研鑽（けんさん）に全力を傾ける。これが教員から教師への脱皮条件である。**

私は，奥住先生というモデルを得て，本気で「教師」になろうと決心した。

5 モデルとなりうる教師から何を学ぶのか

何かの道を究めるには，「手本」「型」「定石」の習得が必要になる。武道，囲碁，落語，料理，どの世界でも同じだろう。手本（モデル）にしたい人は，世の中にたくさんいる。しかし，何をどう学べばよいか。その視点がぶれていたら，いつまで経っても気づけない。

大切なのは，真似たい人（手本）の授業を漠然と見るのではなく，授業の中で見られる，手順や仕掛けなどの「やり方」を徹底して真似ることだ。できれば，話し方も真似てみる。すると「間の取り方」にも気づけるようになる。そうして，初めて「型」と「定石」が見つかる。

ポイントを3つ述べよう。

(1)「眼に見えないもの」を見ようとする

自分が「師匠」と仰ぐ教師の授業を録音させてもらい，家で何度も聞く。教師の発問や指示のタイミングなどを聞き取る。ビデオに撮った場合は，教師の立ち位置，板書のタイミングなどをチェックする。こうすると，いつしか，教室の空気が変わる瞬間が読めるようになる。また，教師自身が心から授業を楽しんでいることが分かるだろう。

(2)「型」ができるようになるまで，真似てみる

「師匠」と呼べる教師は，生徒の学習意欲を高め，やる気にさせる。また，発問やことばかけを工夫している。同じ教材でも，提示の仕方や手順がひと味違う。ことばの使い方，声のトーンが明らかに違う。そこで，教師の発問の

質，つぶやき，目線，間のとり方などを真似てみる。できるようになるまで何百回でもやる。それが「型」の習得である。

(3) 授業の流れを変える「定石」を見つける

職人には，仕事をするときに，必ずやること（定石）がある。様々な場面で見られる「究極の一手」。師匠の授業の中でも，それを見つけることが大事だ。その一手が打たれた途端に活動が促進され，生徒の思考が加速するのが分かるようになる。

このような「手本」「型」「定石」は，ライブ（授業見学やビデオ視聴）でないと見えてこない。本やワークショップで分かったつもりになっていては，自己流の弱点に気づけないままだ。自分の「教師力」を磨くには，手本となる先生の授業を観察する（師匠に弟子入りする）ことが，最も確かな方法なのである。

6 プロ教師は「絶対的指導観」を持っている

私は中学校時代，部活動で剣道をやっていたが，剣士（達人）と言われる人は，素振りの様子を一目見ただけで，クセや弱点をズバリ言い当てた。同じように，職人と言われる人たちは，素材が○か×か，瞬時に見分ける。板前も食材の鮮度や違いを見分けるポイントを熟知している。それが客（相手）を感動させるし，また，そうでなければ仕事にならない。プロと言われるゆえんである。

彼らの眼は，いわば「絶対眼（本物を見極める眼）」である。膨大な量の素材や食材を，真剣に見てきたからこそできる技なのだ。自信に裏打ちされた「絶対眼」はどんなときも狂わない。

教師も，教育のプロである。生徒の実態や変容，教室の空気の流れを読みとる「眼」を磨かなければならない。

例えば，A君の評価について聞かれたときに，パソコンのデータに頼らずに「彼の現在の状態は～です。彼は，～の場面で…」ということを，一人ひとりの実態に応じて説明できるようでなければならない。それが教師の責任である。

教師の場合は，「絶対眼」というより「絶対的指導観」だ。「絶対的指導観」がないと，学習指導は成立しない。つまり，こうすれば生徒が育つという確固たる信念であり，これだけはさせてはいけないという学習規律であり，こうあってほしいという強い願いである。だから，「ずれ」があるとそのずれを瞬時に察知できる。

例えば，音読の大きさがいつもより小さい，あるいは速さがいつもより遅いと，そこで立ち止まれる。心の中の基準になるまで，明るく「はい，やり直し!」という指導が展開できる。協力性，相手を大切にたいという願いを持っている教師なら，生徒のちょっとしたことばや仕草から，指導の必要性を察知する。このような視点が年間を通してぶれない。

一方，「絶対的指導観」を持たない教師は，年度当初に「私はこんなことを大切にします」と生徒に伝える。しかし，指導内容にしか目がいかなかったり，進度を気にしたりして，指導がつい甘くなる。やったり，やらなかったり，一貫性がないので，生徒は「なんだ，結局しなくてもいいのか」と考え，教師のことばや指導をだんだんと軽く受け流すようになる。こうして，集団の士気が下がり，クラスがだんだん乱れていくのである。

「絶対的指導観」は，能力を問わない。学習集団のモチベーションの維持，よいクラス作りのための行動目標である。だから，できていないときは，立ち止まり，きちんと指導してから先に進む。「絶対的指導観」を持っている教師の優先順位は，教科書を先に進めることより，人間力を磨くこと，学習環境づくり，学習集団の育成が先にくる（ただ，あれもこれもと，欲張って生徒に要求すると窮屈になる。2つ，3つ程度にしておくほうがよい）。

「絶対的指導観」は，自分の授業の幹をつくる。その根っことなるのは，教師の「深い人間愛」，「力をつけてほしい」と願う情熱，結果に対する責任感，生徒理解のカウンセリング・マインドなどである。

根っこは人目には見えないため，伝わらないことも多い。

しかし，「根美人」ということばがあるように，根っこさえしっかりしていれば，どんな逆境でも枯れることはない。

太い根っこに支えられた「絶対的指導観」は，高い目標に向けて努力し合うような学習集団を育て，関わり合い，高め合うような人間関係を構築していく。その中で，一人ひとりが，たくましく，思いやりのある人間に育ち，結果として学力も高まるのである。

次回は，「**授業力**」について詳しくご紹介する。教師のくどい説明を減らし，課題と発問の質を変えれば，「教師のやりたい授業」が「生徒が受けたい授業」に変身する。